

「高校」が廃校した市町村地域の漁業産業の実態と持続可能性の検討



厚東 芳樹 (こうとう よしき)

札幌市立幌北小学校 教諭

山口県出身。兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科を修了し、博士(学校教育学)を取得した。その後、岡山県瀬戸内市立邑久小学校、北海道大学、札幌市立幌北小学校にて勤務。小学校の教育現場を中心に教育・研究活動を行っている。専門は、体育科教育学。

1 はじめに

近年、北海道地域は日本全体の中でも高齢化が速く進んでおり、総人口の減少、札幌市など大都市への人口の一極集中、都市部以外の市町村地域の過疎化が急速に進展しつつある。とりわけ、地域で人々が生活する諸条件の不十分さを理由とした子育て世代の「人口流出」(石本,2016)によって過疎化が進む市町村地域の多くでは、70%近くが准高齢者*以上となる高齢化問題が深刻化しつつある。

こうした背景の一つには、大学進学率の低い高校のみが存在することや「高校」廃校など教育問題が関係している(松尾ら,2005)。北海道の場合、2000年の「公立高等学校配置の基本方針と見通し(北海道教育委員会,2017)」を契機に、「公立高等学校配置計画」の発表と実施が行われ、全日制高校に限定していても、2006年から2015年間で道立高校34校、市町村立高校6校、私立高校3校の計43校が閉校になっている。こうした配置計画によって、高校が存在しなくなった地域は2市39町13村にまで拡大した。

ところで、市町村地域で漁業や林業に従事する者の大半は、同地域の高校卒業後、そのまま地元の市町村地域の漁業や林業の職業へと就職する者が多いと言われてきた(加瀬,2011)。そのため、漁業など第一次産業が中心の市町村地域において、高校が廃校し子どもたちが家族と共に地域から札幌市などの大都市へ移住していく現状が進展すればするほど、北海道の市町村地域の産業の持続可能性を困難にしていける危険性が高いものと考えられる。

こうした問題は、後継者不足問題として認識されており、例えば北海道の漁業産業の場合、若い漁業者を育てるために本格的な研修制度を新たに設けた取り組み、「漁業1日体験講習会」を開催する取り組みやPR活動などが積極的に行われている。しかしながら、漁業の後継者不足問題は深刻化する一方であり、いまだ十分な成果を挙げることは出来ていない現状にある。

そこで本研究では、とりわけ深刻な後継者問題が叫ばれている「漁業」に限定した上で、漁業が盛んだった地域の中で高校が存在しなくなった市町村地域(積

* 准高齢者

日本老年学会と日本老年医学会が提唱する高齢者の区分の一つ。65歳から74歳までがこれにあたる。

丹町)を対象に、「高校」が廃校した地域の実態を調査し、「高校」廃校が北海道の市町村地域に及ぼす影響を把握することを目的とした。

2 調査方法および分析方法

漁業従事者に対する調査方法は、フィールドワークにて研究対象者を便宜的に抽出し、インタビュー調査と事例調査を行った。インタビュー内容は、調査協力者の許可を得た上でICレコーダーでの録音記録または筆記でのメモをとった。その後、逐語記録としてテープ起こしを行った上で、その語りの内容・意味や得られた事例を意味解釈法より解釈した。

また、地元で生活する小学生と中学生に対しては、著者が作成した「地域産業に対する質問調査票」を用いた調査を実施した(厚東・工藤,2018)。表1は、回収した地域で暮らす調査対象者のアンケート回答サンプル数などを示している。

表1 調査地域で暮らす調査対象者のアンケート回答サンプル数

子ども (人)	積丹町		浦河町	積丹町漁業 関係者(人)		積丹町 浦河町 漁港数 漁業従事者	積丹町 浦河町 漁業従事者 の漁業収入
	美国 地区	日司・野塚・ 余別地区	浦河 管内	積丹町漁業 関係者(人)	積丹町漁業 関係者(人)	積丹町 浦河町 漁港数 漁業従事者	積丹町 浦河町 漁業従事者 の漁業収入
小学生	24	12	0	40代 9	40代 9	7港 2港	216万円 253万円
中学生	29	16	0	～90代 (女性3)	～90代 (女性3)	238人 362人	
高校生	0	0	239				

表2 積丹町の高校が廃校した理由

カテゴリー	語りの例
ニシン漁が衰退した理由 (漁獲量)について	自分が若かったころ(1940年代)は、本当に町に活気もあってニシン漁ってのは凄(すご)かった。かなり衰退していたと当時でも言われてたけど、それでも凄(すご)かったし、とにかく獲(と)れてたよ。今のイカ漁は、油(燃料費)だけ食ってるとよ。
ニシン漁が衰退した理由 (親方の存在)について	親方の存在は大きかった。雇い主と漁業労働者という関係に近いんじゃないかな。それよりも、凄(すご)いかもしれないね。でも、漁期が終わった後、親方が漁業関係者を連れてて馳走(ちそう)してくれたりしてた。あれは、楽しかったね。みんな飲んで食べて。
ニシン漁が衰退した理由 (賃金)について	ニシン漁は、人手が必要。だけど、東北から沢山の人が若い子から年寄りまで出稼(でか)ぎに来てたから、男の人手は困らなかった。でも、多くの人で売り上げを分けるわけだから、一人当たりの賃金はそれほど高いものではなかった。正直、ニシン漁だけで生活できるってことは無かったと思う。漁が無い間は、みんな大工やったり地元帰ったりと色々してたよ。東北からの女の人もいたけど、それこそ、この地域でも体を売って生活する人もいた。それぐらい、漁だけで生活することは難(むず)しかった。
ニシン漁が衰退した理由 (漁業以外の仕事)について	ニシン漁で儲けが減って来たときに、鉄鋼とか工業関係の仕事の方が稼(かせ)ぎが良くなった。また、この地域だと民宿とかやり始める人が多かった。この港の周りだけでも民宿が20軒近くあったんだよ。
積丹町の人口減少 (札幌への移住)について	昔は、美国地区だけでなく、日司とか余別とかにも本当に子どもが多くいた。小学校ももっと沢山あったからね。本当に人が多くて活気があったんだけど、やっぱりみんな、漁師はキツイから違う仕事選ぶよね。そうすると、やっぱりみんな、札幌にいくんだよ。

4 結果と考察

1) 積丹町で「高校」が廃校した理由

質的分析の結果、5つの理由が抽出され（表2）、三段階を経て積丹町では高校が廃校したものと考えられた。すなわち、【第一段階】「漁獲量」「親方」「賃金」を理由にニシン産業が衰退を始める、【第二段階】「漁業以外の仕事」の方がニシン漁より収入が高い現象が起き始める、【第三段階】より良い仕事を求めて「札幌などへの移住」が始まり人口減少が加速化の三段階を経ていることがわかった。

とりわけ、第一段階の「賃金」が漁師のニシン漁離れを引き起こしていた。つまり、ウニ漁やイカ漁の労働量の対価は比較的高い傾向にあるのに対して、ニシン漁のそれはきわめて低い傾向にあった。また、ウニ漁やイカ漁は2人～3人で行うのに対してニシン漁は膨大な人数を必要とするため、一人分の労働に対する賃金の低さを生じさせていた。さらに、漁期（始納中という）も前者が6月から12月まで実施可能なのに対して、後者は3月から5月ときわめて短いことも漁師一人が得られる「賃金」に関係する。

積丹町に唯一存在した^{びくに}美国高校は、これらの出来事を契機に、1974年、廃校したものと考えられた。

2) 積丹町で暮らす今の子どもたちの漁業産業に対する意識調査

表3は、積丹町で暮らす小・中学生を対象に「漁業」に対する意識調査を実施した結果を示している。漁業中心の地区である日司・野塚・余別地区では、(1)地域産業である漁業については「とても知っている」「少し知っている」、(2)地域産業である漁業は「深刻な問題を抱えている」、と回答した子どもが大半であった。

一方、観光業と漁業の両輪を持ち小樽市など比較的都市部と近い美国地区では、日司・野塚・余別地区とは異なり、(1)地域産業である漁業については「ほとんど知らない」、(2)地域産業である漁業が深刻な問題を抱えているとは「知らなかった」、と回答した子どもが大半であった。

これには、日司・野塚・余別地区よりも余市町や小樽市など比較的大きな町との生活空間の距離が近いことが関係している可能性はある。すなわち、子どもたちは見たことがない、聞いたことがない職業については情報や知識が存在しない。それ故、都市部が生活の身近にある美国地区の子どもたちは、漁業関係の保護者が多かった日司・野塚・余別地区の子どもたちよりも将来の夢で多種多様な職業を挙げていたものと推定

表3 積丹町の小・中学生の漁業に対する意識調査（中学校卒業後の漁業への就職希望）

	質問内容	美国地区(24人)		日司・野塚・余別地区(12人)	
		保護者が漁業関係者ではない 20人	保護者が漁業関係者 9人	保護者が漁業関係者ではない 13人	保護者が漁業関係者 3人
小学生	中学校を卒業したらどうしますか？	進学希望 15人 就職希望 2人	進学希望 7人 就職希望 0人	進学希望 7人 就職希望 1人	進学希望 1人 就職希望 3人
	将来の夢は何ですか？	ケーキ屋、プログラマー、コンビニ店員、大工、プロ野球選手、会社員、ラグビー選手、美容師、獣医	パティシエ、スキージャンパー、ローソン店員、CA、看護師、学校の先生	お坊さん、会社員、寿司屋、板前	漁師、カネマサ商店、バドミントン選手、プロ野球選手
中学生	中学校を卒業したらどうしますか？	進学希望 18人 地元で就職希望 0人 地元外で就職希望 2人	進学希望 7人 地元で就職希望 1人 地元外で就職希望 1人	進学希望 10人 地元で就職希望 0人 地元外で就職希望 3人	進学希望 1人 地元で就職希望 2人 地元外で就職希望 1人
	将来の夢は何ですか？	漁師、保育士、パティシエ、獣看護師、警察官、プロ野球選手、図書館司書、法医学者、コーディネーター	漁師、教師、看護師、警察官、公務員	獣医、獣看護師、教師、プロ野球選手、薬剤師、建築士、女優、アニメ関係	漁師、看護師、公務員
	地元の漁業をどれほど知っていますか？	「知っている」 5名 「何となく」 9名 「知らない」 6名	「知っている」 4名 「何となく」 2名 「知らない」 3名	「知っている」 12名 「何となく」 0名 「知らない」 1名	「知っている」 3名 「何となく」 0名 「知らない」 0名
	地元の漁業の現状をどう思いますか？	深刻な問題がある 5名 自慢である 9名 興味がない 11名 安定産業 1名 引き継ぎたい 2名 その他 0名	深刻な問題がある 5名 自慢である 7名 興味がない 1名 安定産業 3名 引き継ぎたい 1名 その他 0名	深刻な問題がある 7名 自慢である 12名 興味がない 0名 安定産業 2名 引き継ぎたい 0名 その他 1名	深刻な問題がある 3名 自慢である 3名 興味がない 0名 安定産業 0名 引き継ぎたい 2名 その他 0名

できた。

他方、両地区に共通して、「現在の地域に残る」「漁業産業を引き継ぐ」と考えている子どもは皆無に近い状況にあった。これには、「高校」への進学希望者が多く、中学校卒業後には他地域での生活が中心になると捉えていたことが関係するものと推定できた。

ここに、「高校」が消滅した地域では地域産業が衰退していく大きな要因があるものと考えられる。つまり、どれだけ漁業など地域産業への想いが育ったとしても、「高校」進学を理由に地域を離れ、そこで新たな職業に関わった情報や知識を得て、より良いと感じ希望する職業が多岐に渡っていくことで、地域産業である漁業を選択する可能性も低くなっていくものと考えられた。

3) 浦河町で暮らす高校生たちの職業選択に関する意識調査

ここでは、漁業産業が盛んな地域で高校がただ一つだけ存在する浦河町を対象に、高校生たちが職業として漁業を選択肢にあげるか調査した結果を示す。これにより、高校廃校が真に漁業産業の後継者問題と関係しているのか検討した。

地域産業である「漁業」に対する意識を問うと、漁業の内容や働く方々についての認知度は高い（68.0%）傾向にあったものの、「消滅するのは寂しいが仕方ない」「消滅するのは何とも思わない」と回答した者は48.0%、「漁業に興味を持ったことがない」「地域産業に漁業があるとは知らなかった」と回答した者も36.0%存在した。一方、「漁業」が深刻な問題を抱えていると感じている高校生は6.3%ときわめて少なかった。また、自由記述欄での記述には、「漁業では生活ができないと聞いたことがある」「危険な仕事なのに儲^{もう}からない」「漁師さんのイメージが悪い」など、漁業産業の賃金や漁師に対するマイナスなイメージの記述が散見できた。

他方、将来の進路希望を問うと、地元に残り漁業関係の仕事を引き継ぎたいと考えている者は239名中1名に留まった。ただし、「現在の地域での継続的な生活の希望」は2割近く（18.3%）存在した。

これらより、ほとんどの子どもたちが地域を出て行

く積丹町とは異なり、「高校」存続は将来的に地域に子どもたちを留め、地域を構成し守っていく人材育成としてきわめて重要な役割を果たしていることがわかった。一方で、仮に地域に留まったとしても、漁業など地域産業を引き継ぎ守っていくことを選択する高校生が必ずしも存在するとは限らなかった。ここには、「漁業は危険でキツイにも関わらず賃金が低い」というイメージが強く、こうしたバイアスによって職業選択から消されていることが、自由記述欄の記載内容より考えられた。

5 まとめ

地域に高校が存在するということには、地域に子どもを留め、地域を構成し守っていく人材育成という観点から、きわめて意味あるものと考えられた。その上で、漁業を職業選択肢の一つとして高校生に取り入れてもらう活動が重要になるものと考えられる。具体的には、「労働に対する賃金の改善」や「漁業という職業の情報発信」を行っていくことで、地域に留まった高校生たちの中から漁業という職業を選択してもらう可能性をいかに広げていくか、これが地域の漁業産業を守るためには急務な課題であるものと考えられた。

参考文献

- ・北海道教育委員会（2017）「公立高等学校配置の基本方針と新たな高校教育に関する指針」．www.dokyoj.pref.hokkaido.lg.jp/hk/akd/H18SISIN.htm（2017年10月9日閲覧）
- ・石本千晴（2016）地域におけるスポーツチームの自律性—スポーツチームの経営面に着目して—．北海道大学修士論文．
- ・加瀬和俊（2011）沿岸漁業における後継者問題—その現状と展望—．水産振興，45（7）：1-58．
- ・厚東芳樹・工藤和由（2018）漁業地域に「高校」が存在するということ—漁師と子ども達が教えてくれたこと—．一粒書房：愛知．
- ・松尾鷹志 他（2005）座談会 私たちは負けてはいない—大阪府立高槻南高校廃校問題をふり返って—．岩波書店：東京．

※ 当レポートについては下記をご参照ください。

厚東芳樹（2017）「北海道における「高校」が廃校した市町村地域の実態と持続可能な支援モデルの構築—「漁業」が盛んな地域に着目して—」『北海道開発協会平成29年度助成研究論文集』（一財）北海道開発協会ホームページ